

# WACCA

MONTHLY REPORT



## 10/29 あそび基地

10月はハロウィンということで、まずはマントを作りました！  
 参加した子どもは、2歳から小学5年生まで11人。  
 シールをペタペタ貼っていく子どももいれば、手描きの絵を  
 貼り付ける子どももいて、それぞれの個性が表われました。



は〜い、完成しました〜。



いざ、マントを着けて商店街へ！  
 お店の皆さんも通りを歩く人たちも  
 笑顔で見守ってくださいました。



お店に向かって歩いている  
 とき、小学生の子たちが幼  
 児の手をつないで歩く姿を  
 見かけました。  
 子どもたちの成長を感じた  
 場面でした。  
 WACCAに戻ってきた子ど  
 もたちの袋はお菓子がいっ  
 ぱい！子どもたちは大満足  
 で帰っていきました。

『パープル・ハイビスカス』

著者：チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ  
訳者：くぼたのぞみ  
出版社：河出書房新社



< 内容 >

カンピリは、ナイジェリアの裕福な家庭に生まれ育った15歳の少女。しかし、厳格なカトリック教徒でもある父親は、西欧的な価値観に沿って篤志家の顔を見せながら、家庭内では圧倒的なパターンリズム(家父長主義)で家族を支配する人物だった。

カンピリと兄のジャジャは、叔母の家に預けられたことで、貧しいながらも心豊かに暮らしている叔母たちの生き様から「自由」を知る。

「キリスト教的な愛」「親としての羨」と幾ら言葉を飾ろうとも、父親の行為は「暴力」に過ぎない。カンピリとジャジャは反抗心を抱き、「自由」を象徴する紫のハイビスカスの茎を隠し持つようになる。



ナイジェリアと言えば、ボコ・ハラム(イスラム過激主義組織)による女学生の集団拉致事件や、男尊女卑が酷い国だということしか知らず、女性(女児)の識字率は相当に低いと思い込んでいました。そのため、ジェンダー平等やフェミニズムに基づいた「支配からの解放=自由」を書く女性がいたと知って、本当に驚きました。ただ、これは長編小説で内容も重いため、勧められても簡単に読み始められないと思います。

そこで、お勧めなのが……

『男も女もみんなフェミニストでなきゃ』

著者：チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ  
訳者：くぼたのぞみ



『男も女もみんなフェミニストでなきゃ』は、『パープル・ハイビスカス』と同じ著書・訳者です。2012年にTEDでスピーチした内容をまとめている本なので、とても読みやすいです。

語られているのは、「テストで最高点を取っても、女性という理由で学級委員にはなれない」、「女性がチップを出しても、相手は隣に突っ立っている男性に礼を言う」、「女性がどんなに良い意見を出しても、上司は別の男性部下の功績に回す」、「共働きの夫婦でも、家事育児の大半は妻が担っていて、育児をする夫に向かって妻が礼を言う」……日本でもよく聞く「ジェンダー差別あるある」なので、著者の憤りに共感しながら読み進められます。

著者は、ジェンダー平等やフェミニズムについて熱く語っても、他人事として聞き流したり、「人権」という言葉を使ってジェンダー差別の色を薄めようとする人が多いことに気付いています。

原著のタイトルは、『We should all be feminists. (私たちは皆フェミニストであるべき)』ですが、「all(皆)」という表現では、「俺には関係ない」という男性や、「私は差別と感じてない」という女性には響かないかもしれません。

だからこそ、邦訳のタイトルは『男も女もみんな』として、ジェンダーにかかわらず全ての人が考えるべき問題であると訴えているのでしょう。

